

新幹線が滑るようにプラットホームに入ってきた。ホーム柵にやや遅れて車両扉が開くと、慣れた手つきで駅員がスロープ板を渡した。

車内の多目的室まで笑顔で案内してくれる。車いす利用者に限らず、具合の悪い人や授乳、おむつ交換など、さまざまな用途で使えるスペースだ。すぐそばには、広くなったバリアフリートイレもある。座席には車いす向けのスペースも確保されている。鉄道も設備改良でこうしたユニバーサルデザインへの配慮が見られるようになった。

利用者が多い駅舎ではバリアフリー化の工事がほぼ終わり、お年寄りや障害を持つ人だけでなく、ベビーカーを使う人や大きな荷物を抱えた人も利用しやすくなっ

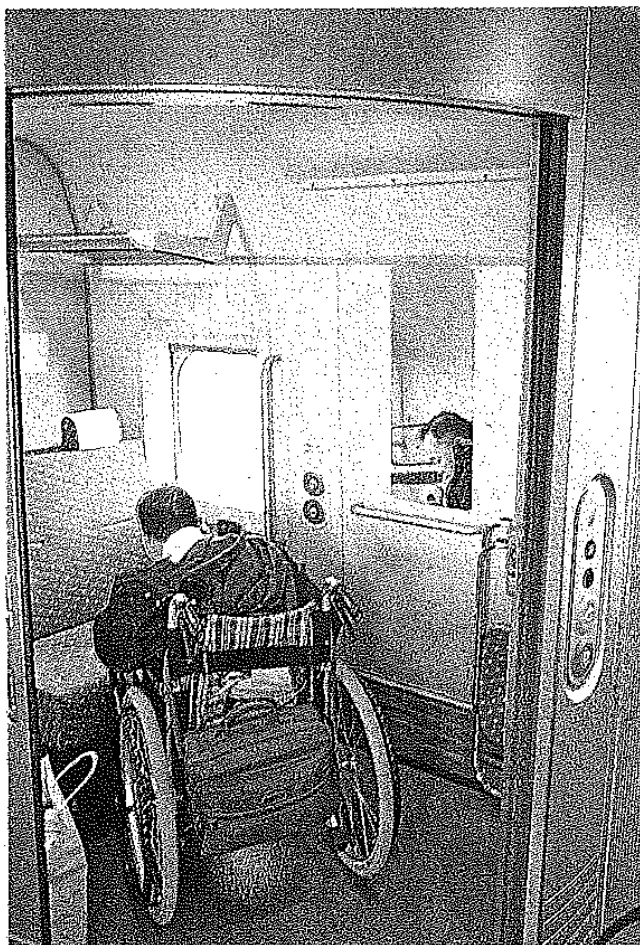
ソフト面さらに改善を

進む鉄道バリアフリー

た。複雑な構造の駅舎では、分りやすい表示も重要だ。駐車場や停車場からのアプローチも大切な動線の確保で、こうしたポイントにも配慮した整備が待たれる。

鉄道の旅には交通エコロジ

・モビリティ財団が提供しているホームペドジ「らくらくおでかけネット」が便利で、全国のバリアフリー情報を調べることができる。この10年で鉄道サービスのバリアフリー化は大幅に改善され、特筆できるのは駅員らの対応が向上したことだ。ただ、車いす利用者などにとっては大変な手間となる乗車券予約購入時の障害者手帳の



誰でも使える新幹線の多目的室

提示義務など、ソフト面で改善してほしいと思う点もまだある。さらにホーム柵の設置なども求められているが、こうした整備は時間も費用も掛かる。使う側も十分注意が必要だし、周囲にいる人の配慮や助けが大切だ。

車いす利用者の中には多くの鉄道ファンがいる。かつて「夢の超特急」と呼ばれた車両は代替わりの時を迎え、技術の進歩はさらに夢を膨らませる。見るもよし、撮るもよし、さらに聞くもよしというのが鉄道ファンだ。

国のバリアフリー新法は、高齢者や障害者が自立した生活を営むことができる社会を構築することが重要とし、鉄道もバリアフリー化の重点項目の一つだ。体が不自由になっても、大好きな鉄道旅行はいつまでも自由にできる社会でありたい。

(日本トラベルヘルパー協会理事 篠塚恭一)